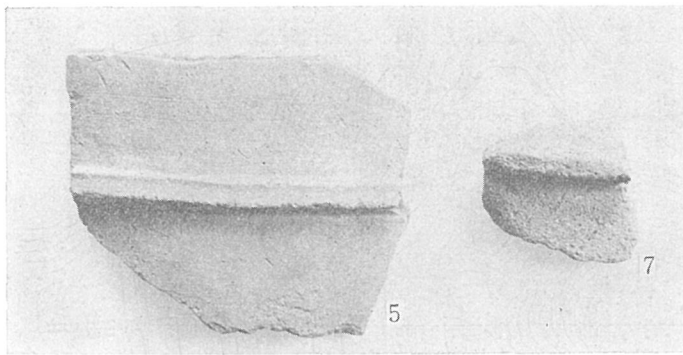




第25図 恵我藁伏岡陵の出土品

を手掘りで行なった。土相は、砂利を多く含んだ茶色ないし褐色の土層で、埴輪片、古瓦片を包含する後世の盛土である。遺構は検出されなかったもので予定通り施工した。

遺物は、埴輪七片と瓦三片が盛土の各部分から出土している。

埴輪円筒（第24図1・6・第25図） 胴部片ばかりである。径の復元できたものは、約四〇センチと大きい。突帯はいずれも断面が台形を呈

し突出度には個体差があるが、どれもしっかりとつくりである。

外面の調整は横刷毛目を基調とするが、部分的には縦刷毛目を残すものもある。横刷毛目はいわゆるB種と呼ばれる断続的なもので、幅約五センチを一単位としたことが、条痕から窺える。また内面にも斜の刷毛目を施したものである。

色調は、黄褐色ないし赤褐色である。なお5の胎土中には金雲母が含まれている。

朝顔形埴輪（第24図7・第25

図） 胴部から花芯部に向かう肩部の破片である。器壁は他の埴輪円筒に比して厚いが、最も重みの加わる部位であるため、他の部分は薄くなる可能性も考えられる。突帯の底面には丹を塗布した痕跡を残す。当初は外面全体に丹彩したものであろう。

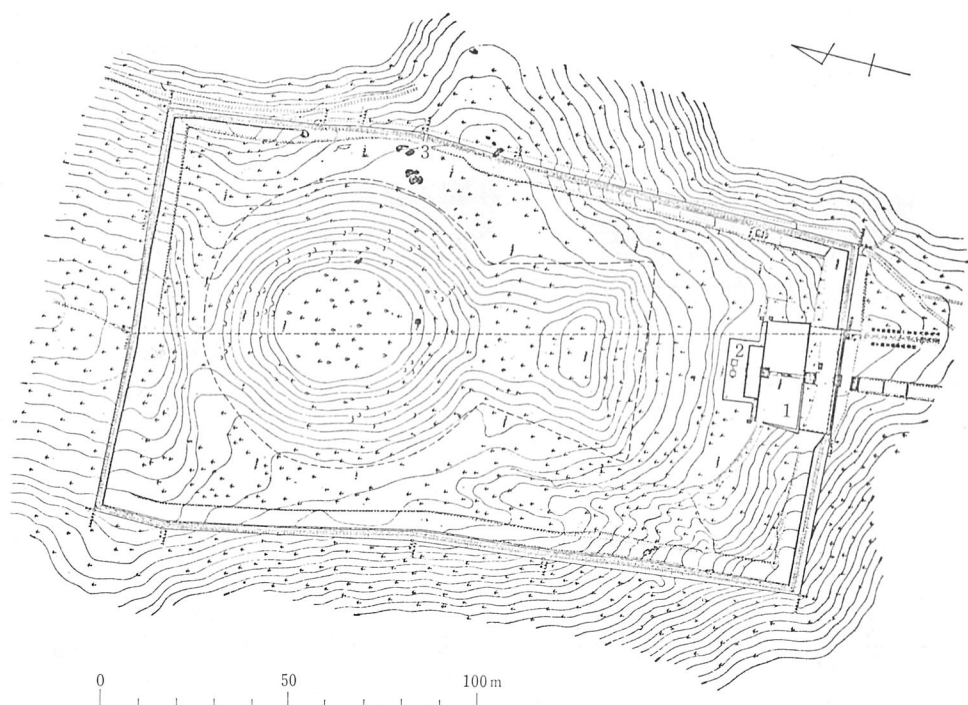
瓦（第24図8・9） 凹面に布目、凸面に縄目の圧痕ある平瓦である。9は周縁に一・二センチ幅の浅い面取りを有する。また凹面の一部には布目上に粘土が貼り付き、これを削り取った痕跡が認められる。色調は、8が灰黄白色、9が暗赤褐色を呈し、焼成は共にあまい。

（土生田純之）

大吉備津彦命墓整備工事箇所の立会調査

大吉備津彦命墓の整備工事に際し、昭和五十五年十二月四・五の両日に立会調査を実施した。調査にあたっては、岡山県教育庁文化課文化財二係長河本清・同文化財保護主事平井勝の両氏にご協力をいただいた。

当墓は岡山市の中心部から西方へ約五キロの吉備中山南側の尾根上に位置する。丘尾を切断して造られた南面する前方後円墳で、別名「茶臼山」あるいは「臼の御陵」と呼ばれている。その両側面には、緩傾斜ないし平坦な面があって、当墳の基底面となっているので、図の破線のように墳麓を想定することができ。工事箇所は、墳丘から離れているが、念のため工事に立ち会った。



第26図 大吉備津彦命墓立会調査箇所位置 (1/2,000)

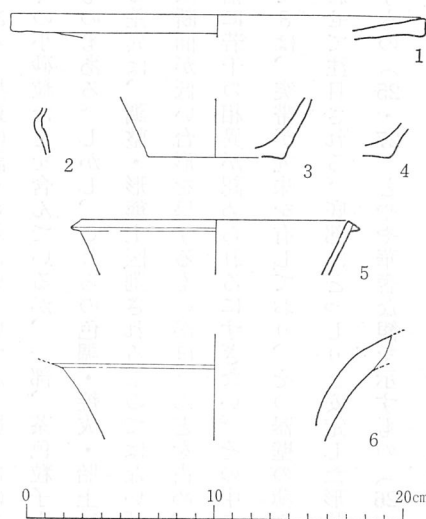
立会調査箇所は御拝所石垣の改修部分(第26図1)、鳥居建替部分(同2)、陵側の出入口取設部分(同3)である。石垣改修部分では御拝所の西辺から正面西半分にあたる延長二三メートル、高さ約四メートルの石垣を積み直すため、旧積石を取りはずした。硬くしまった赤褐色砂質土の地山が厚さ六〇センチ程露出しており、その上は御拝所築造時の黄褐色砂質の盛土である。鳥居建替部分は、縦横二メートル、深さ一・五メートルの柱穴を二箇所掘削した。柱穴内壁面の土相はしまりの良い黄灰色砂質土の地山層で、床面中央には旧鳥居の基礎石が残存していた。東側の出入口取設部分では墓域の周囲を区画している幅約一メートル・高さ約四〇センチの小土堤を長さ一メートル程除去した。この小土堤は軟弱な赤褐色粘質の盛土で、この上には堆積土が無く、新しい時代に築かれたことが知られる。小土堤の除去断面と除去土から土器片が採集された。

上記のように三箇所とも遺構は検出されなかったので、予定どおり工事を実施した。

今回の立会調査で採集された土器は弥生式土器と思われる一五片、その他の土器二片である。

弥生式土器(第27図1~4)

1は、壺あるいは甕の口縁部。ほぼ水平に近く開き、口唇部は肥厚し平らに終わる。明赤褐色を呈する。2は、甕の肩から頸にかけての部分。屈曲部の外面に横撫でが認められる。赤褐色を呈する。3・4は、



第27図 大吉備津彦命墓出土品 (1/4)

壺あるいは甕の底部。ともに下面は、周縁を指でつまんで上底風にした平底で、内面は篋撫でされている。3が赤褐色、4が濃褐色を呈する。このほかに、赤褐色あるいは黄土色を呈する細片十一片があるが、器形等は不明。

その他の土器(第27図5・6)

5は、口縁部と考えられる。斜上方に立ち上り、口唇部は粘土を貼り付けて断面三角形に作る。薄手で土師質である。黄白色を呈する。長頸壺に似かよっているが、開き具合が大きすぎ、類例を知らない。6は外反しながら立ち上り、擬似口縁をなす。その外面には、上に続く部分の一部が残存している。他の土器に比べて厚手で、埴質に近い。明赤褐色を呈する。

今回採集された土器片は全体的に内外面の風化が著しく、調整技法はほとんど不明である。また、胎土中に白色砂粒を多量に含んでいる点が目立つ。

(佐藤利秀)

白鳥陵墳丘裾崩壊箇所調査

当陵の墳丘裾には埴輪列がめぐらされているが、昭和五十五年十月豪水を落水したところ、墳丘裾が三箇所にあたって崩壊し、埴輪片が露出散乱しているのが認められた。そこで、急遽、現状を記録し、保存処置についての対策を考究することになり、同年十一月一日に調査を行なった。調査は、埴輪露出地点を略測・写真撮影し、原位置から離れた埴輪片を採集した。これらの埴輪採集地点は、後円部東側のA地点と、南側くびれ部分を中央に挟み相対するB地点、前方部側のC地点の三箇所である(第28図)。これらのうち、A地点では大木を挟み約五メートルにわたって封土が削り取られ、埴輪の側面が露呈している(図版五3)。特に南側部分では、約一〇センチの間隔をおいて、円筒埴輪が隣接しているのが観察される。原位置を離れた埴輪片は、一部水際付近にまで散乱している。B地点、C地点では、墳丘裾が数十センチ程削り取られて、いるのが認められるものの、埴輪列は観察できない。付近では埴輪片が散見できた。